

《研究ノート》

エドワード・ハーバート『自叙伝』（翻訳）

—— (3)「通常教育に関する所見（後編）、
そして遍歴の騎士時代」——

山根正弘 訳

[訳者による前口上] 十七世紀イギリスの外交官にして詩人および哲学者・歴史家、さらにはリュート音楽にも精通したエドワード・ハーバート（チャーベリーのハーバート卿）による半生の続き。幼年時代から思春期を振り返る中、自らの体験に基づき、子孫宛に家訓とともに通常教育に関する所見を披瀝するが、その脱線のあと小伝に戻る。念願の諸国遍歴のため、その第一歩をフランスで踏み出す。その経緯は、こうだ。父親を早くに亡くし、十六歳の若い身空で姉女房をもらった著者が、母の同調圧力に屈し九人の兄弟姉妹の面倒をみる破目になり、一旦は夢を諦める。その後、一六〇三年、二十歳のとき、即位したばかりのジェームズ一世よりバースの騎士^{ナイト}に叙勲されると、それを足掛かりに父方の郷里ウェールズはモントゴメリーの州長官や州選出の代議士となる。しかし、一六〇八年、二十五歳のとき、寡婦を通していた母親が再婚して孟母三遷の呪縛が解かれたのか、ようやく海外視察の機が熟し、妻子を残して冒険の旅に出る。年齢の点からも、家庭教師付のグランド・ツアー（教養志向の諸国漫遊の旅）とかなり趣を異にしていた。最初に降り立った先は、フランスはパリ、市外街区フォブール・サン＝ジェルマン。そこで出会ったヴァンタドゥール公爵夫人（アンヌ・ド・レヴィの妻マルグリット）の伝手で名門貴族モンモランシー家の知遇を得る。公爵夫人の父モンモランシー公爵（初代アンリ；アンヌ・ド・モンモランシーの次男）の庇護のもと、風光明媚なシャンティイ近郊のメルルー [メロ] で、馬術や剣術の手ほどきを受け、また野猪を仕留めるなど狩猟に没頭し騎士としての素養を身に付ける。中世のロマンスに描かれる遍歴の騎士さながらの修練であった。

訳文中、諸々の括弧の使い方は、従前どおり。

なお、訳者が施した注についても、その番号は前号より続く連番である。

私がことさら励んだ身体の鍛錬のうち、何にもまして子孫に奨めたいのは、馬術 [軍馬を乗りこなすこと] と剣術 [フェンシング] である。このふたつの武術では、英国式やフランス式それにイタリア式のいずれにおいても達人の域に達している。舞踏 [ダンス] に関しては、常に他の技芸や学問に頭を悩ませており、習得する暇を見出せなかった。しかしながら、以下の順で三つの稽古を励むように願う⁽²¹⁾。

舞踏は、身体を創りあげ、立ち居振る舞いが美しく物腰を柔らかくするため、それを最初に学ばせるとよい。なぜかというと、舞踏の稽古を積むことにより、四肢はある種（フランス風に言えば）しなやかになり、敏捷性を増すから。しかも、他の者よ

り脚や腕それに体軀を見事に使いこなせるようになる。舞踏経験のない者は、関節を掴まれ身体の自由を奪われたが如く、姿勢が強張り硬直する。私の望みは、若者が人前で身じろぎせず畏まるのではなく、身体を動かす機会があれば、その所作が見目麗しく優雅たれ、ということである。それも、人々が集うところで広間に入出入りする仕方を、そして出会う様々な人々の地位や身分に応じて立派にお辞儀する仕方を、さらに帽子を脱ぎ手に持つ仕方を学べるようにする。粹人に相応しいこれらの所作や他の多くの作法は、さらに精確にフランス舞踏の師範に学べる。

次に、若者（十一か十二歳より前ではいけない）が励む鍛錬は、剣術である。剣術を極めるには、フランス式の稽古が優れている。つまり、足と目を鍛えることである。足稽古を積めば、敵に突きを喰らわせるのに歩幅が解るだけではなく、大腿で敵を追い越すこともなく、剣の切っ先で敵の急所を突くのに失敗することはない。足の次に門弟が行なう目の鍛錬で大切なことは、敵の剣先をしっかりと見据えることである。その目的は、突きなど敵の攻撃を躲して身を護るとともに、こちらの剣先を敵に向け、むきだしの無防備な部位に差し込むことである。

優れた剣術の師範は、特にフランスでは、フルーレ、つまりフォイル〔細身の剣：切っ先を鈍らにするか、剣先にたんぽを被せたもの〕を門弟に渡し、剣には腰と呼ばれる堅い部分と、しなりと呼ばれる撓む部分とがあることを教える。門弟に、剣の柄から三分の一ほどの長さまで拡がる腰を使って防御し、つまり相手の突きなど攻撃を受け流しながら身を護り、残りの三分の二ほどのしなりを使って、機会を窺い突きなどの攻撃に出るようと教える。この稽古ではまた、相手に応じて高くあるいは低く突く方法や、相手との間合いや攻撃に移るまでの間の計り方を簡潔に教える。そうすることで、防御するとともに反撃することができる。私も試しにフルーレを握り、両方の方法を行なったことがある。そのやり方は、一度に多勢と真剣で闘う時と同じであり、その勇姿は今後登場する予定である。自慢話はするつもりはないが、もしお許し頂けるのなら、私ほど剣の扱いに慣れた者もないし、あらゆる機会に勝利を巧みに収めた者もない。手傷を負うとすれば、それは剣術の腕前を過信する以外にない。

軍馬に乗る教練に多大な時間を費やした。馬は他の動物より人間に役立つように創られた。騎手に思う存分の便宜、時には馬力、時には敵を倒すのに必要な敏捷性や運動能力などが与えられる。名馬に名騎手が跨れば、鬼に金棒である。馬を優雅に乗りこなす方法は、騎手が目線を馬の両耳の間に常に据え、鞭を馬の左耳の上で握ることである。鞭があれば、あらゆる方角に向きを変えられる。馬を右方向に進めたければ、左足で合図するとともに馬の首の左側に鞭を当てる。左に進路をとりたければ、右足で合図し、（必要とあれば）鞭の扶助を借りる。しかしこの方法は、馬にこれらの動きを理解させるためのものであり、通常訓練を積んだ馬の場合、足と鎧を馬の肩に当てるだけで十分であり、さらに手綱の扶助があれば四方八方に向きを変えられ

る。このようにすれば、騎手は剣を使えるし、馬を一方の側に寄せる必要に迫られたとき、手綱を等分に保ち、ふくらはぎと足のひら、あるいは鎧を馬の肩に軽く触れるだけで、どちらの側にも寄せられる。しかも、前に進んだり、後戻りしたりする必要がない。

フランス人の用語でいう有用なエア〔諸跳躍の総称〕には、テール・テール〔小刻みな前方跳躍〕、クルベット〔騰躍〕、カプリオール／カプリオール〔垂直跳躍〕、あるいはユン・パ・エ・ユン・ソル〔疾駆と跳躍と騰躍の連続技〕がある。それらのエアは、軍用というより観兵式や凱旋用の馬に適している。だが、クルベットとともにデミ・ヴォルト〔半巻き乗り〕も捨てきれない。メレスなわち混戦や乱戦で使えるようにあまり高く跳ねさせてはいけない。ラブルーが馬術書で指摘しているとおり⁽²²⁾、モンモランシー閣下〔フランスでの恩人〕はデミ・ヴォルトを見事にこなす馬を持っており、馬上試合でフランスの主だった伊達者を前にして、馬に跨ったまま相手をふたり剣で打ち落としたことがある。馬がクルベットの高みの達したとき、間をためて一撃を放った。剣に体重と重力とが加わり、ふたりの騎士を薙ぎ倒したという。

騎乗で一对一の対戦を行なう仕方については、次のように習った。ふたりとも手頃な堅さの馬鞭それも剣の丈ほどのものを手に持ち、向き合って駒を進める。一方が手練の騎手である場合、その人物がまず鞍上のまま手出しせず通過し、私の背後につく。そのあと方向を転換し、右手に持った鞭を私の左脇腹に当てる。そうできれば、私の急所を剣先で突けたのも同然。これを巧みに行なう者は、必ず相手を倒せる。というのも、相手は剣を振る間合いがなく、防御や攻撃に転じられないから。相手より優位に立つ、フランス語で言うところの馬の尻尾を捕らえるためには、相手が通り過ぎるまでに、馬をただ横這いに移動させることほど有用な手立てはない。この手法を用いれば、相手の打撃や突きを躲して、先述の方法で相手の左側に即座に到達できるからだ。だが、この技法については、ラブルーとプリュヴィネルを読むとよい⁽²³⁾。ふたりは、老練の調馬師であり、告白せねばならぬが、私も教わるころ大であった。正直に言うと、若駒を二、三頭駄目にし、そのあと一番たやすいエアを仕込んでみたが、すっかり馬脚をあらわして、自身が犯した過誤が師範の指南より多いのが身に染みて解った。

軍馬を戦争の駒として使うには、その馬に恐怖心を植え付けないことが肝腎である。そのためには、以下の創意工夫が役に立つ。はじめは厩舎の外で太鼓を叩きながら秣まぐさを与える。次に厩舎の中で徐々に太鼓を叩き、その音を鳴らして秣を与える。太鼓の音に十分慣れたら、餌を与える前に厩舎の外で短銃を撃つ。それから厩舎の中で短銃を撃ち、短銃の音に慣れる寸前まで、徐々に近づけていく。ここで忘れてならないことは、銃を撃つたびに餌の量をさらに増やすことである。馬丁に煌めく甲冑を着させ、馬のかかとを撫でさせたり、馬櫛で毛を梳かせたりすることだ。甲冑を着た馬

丁の前で剣を揮^{ふる}うとよい。それが済むと、さらに餌の量を増やす。最後に、馬を見晴らしのよい平原に連れ出すが、そこにはあらかじめ煌々と輝く甲冑を杭に掛けておき、武装兵と見誤るようになっておく。準備が整うと、例の武装案山子に近づけるだけでなく引き倒せるまで、馬を馴れさせる。この訓練が終わると、敵に対して同じことを繰り返し行なえるように、実践でも餌を与えることを忘れてはならない。また、平原でふたりの男に外套を持たせ、馬に跳び越えさせる訓練をする。馬が高く跳べるようになると、折を見てなお高く上に揚げるのがよい。さらに、馬を水に馴致させる。次のようにすれば、うまく馬を泳がせ川を渡らせる術、水馬^{すいば}に自信が持てる。適した川で手綱の長さを保ち馬の頭を制御しながら艫^{とも}の跡を追わせるか、あるいは、リネンの胴衣を身に着け膝丈の半ズボンをはいた泳ぎの名手をあてがうとよい。

こむら返りや痙攣を起こす体質^{たうち}でなければ、ジェントルマンの素養のひとつとして、泳法を身に付けることだ⁽²⁴⁾。実を言うと、私自身は泳げない。というのは、かつて水泳を習っているとき溺れそうになり、後生だから二度と泳ぐ練習をしないでくれと母から懇願されたからだ。さらに続けて母上が言うには、水練で命が助かった人より、水難で溺れ死んだ人の方が多いと聞いたという。この言い種^{くま}に納得した訳ではないが、慈母の厳命に従った。また、跳躍やレスリング、それに馬の背に跳び乗れることも大事で、これらは使い途が多い。同様に、弓術の稽古を大いに奨める。健康によく、しかも戦争に役立つという長所がある。長弓隊〔縦置きの弓：ロングボウ〕にも取り柄があるにもかかわらず、銃士隊は難癖をつける。数多の銃士隊を配置する代わりに、射手を百人配備すれば、げに弓矢の射程内であれば、〔銃士がマスケットに弾を一発込める前に〕ひとりの射手が矢を二本放つばかりか、一矢で敵をふたり射殺せること請け合いである。

奨励しない鍛錬は、競走馬に乗ることである。この種のこと、つまり競馬には八百長が付き物である。競走馬は、主に一目散の逃走に役立つだけなのに、なぜ立派な紳士が打ち興じるのか解らない。狩猟馬に乗ることも、あまり好きにはなれない。研究熱心な人に節約できる以上の時間を浪費させるから。したがって、何かメリットがあるとすれば、その娯楽を知れば十分で、日々実践する必要はない。上記ふたつと較べると、あまり時間をとらせない鷹狩りの方がまだましである。善良な競技仲間を選ぶという条件付きで、木球〔ボウリングの原型〕は多少認められる。

許容できない賭け事は、賽^{ダイス}と札^{カード}を使う博打^{ばくち}である。特に、賭けに大枚を投じ、無為に時を過ごせば尚更であろう。賭場に頻繁に出入りすれば、博徒が出迎え、若者は有り金をすっかり巻き上げられてしまう。こういった教育のすべての点に関して、特に友人や見知らぬ者との付き合いの中で遵守すべき礼儀作法について、その気になれば、さらに多くを語ることもできる。だが、大作になってしまう恐れがある。しかもそれら教育の方途は、イタリア人グアッツォやデッラ・カーサの礼儀作法書にすでに

思慮深く説かれている⁽²⁵⁾。

子供や召使いそれに借地人や近隣と、どのように付き合うべきかについて特別な講義を受ける必要がある。このような訓育は学校の瑣末な勉強より若者に役立つ、と自信を持って断言できる。実は、この趣旨で多くの資料を集めてきたが、ここに開示するのは控えよう。神の御恵みで健康で長寿を全うできたら、この点に関して小論を上梓する所存である⁽²⁶⁾。さて、小伝に話を戻そう。

十八歳か十九歳に達したとき、母上は私と妻を連れてロンドンに引っ越した。上京して皆で家を借りた。寡婦という母の境遇や新婚生活には相応しからぬ大所帯である。六人の弟と三人の妹を養う破目になった。父は遺言を書かなかったのか、あるいは残したとしても不備があったのか、杳として知れない。母が亡き父の借地権と動産すべてを手に入れ、それ自体かなりの価値があったものの、兄弟たちを扶養する負担を私に押し付けたがっているのがありありと感じ取れた。それで、身内の者を喜ばせるため、六人の弟にそれぞれ生涯三十ポンドの年金を、三人の妹にそれぞれ千ポンドの持参金を与えることを、自らの意思で決めた。妹たちは、前述のとおり、持参金のお蔭で嫁ぐことができた。末の妹〔フランスス〕は、近隣から余計な横槍さえ入らなければ、玉の輿に乗れたであろうに。

キリスト紀元一六〇〇年頃、ロンドンに上京した。その直後、史書に載っているように、エセックス伯〔第二代；ロバート・デヴルー〕が謀叛を企てた〔一六〇一年二月七日〕。ここで詳しく述べるより、その手のテーマを扱う書物を参照してもらいたい⁽²⁷⁾。それからほどなく、野心というより好奇心ゆえに宮廷に赴いた。当時の君主で偉大なる女王エリザベスの御前では、男は一様にひざまず跪くのが習わしであり、私もその例にならい謁見室で跪いていた。女王陛下がホワイトホール宮の礼拝堂に向かう途中の出来事であった。私に目を留めるとすぐ歩みを止め、件の口癖⁽²⁸⁾が口を衝いて出たかと思うと、すいか誰何された。そなたはたれそ。そこに居合わせた方々は私の方に目を向けたが、だれひとりとして判らず、やがて佇む陛下に気付いた近衛兵サー・ジェイムズ・クロフトが駆け寄り、氏素性を明かした上で、サン・ジュリアンのサー・ウィリアム・ハーバートの娘とすでに結婚していることを伝えた。陛下はしげしげと私を見つめ、例の口癖を口走り、若い身空で所帯を持つとは哀れなものよ、と仰せられた。その後、キスをさせるため御手を二度差し延べられた。二度にわたり、差し出された御手で私の頬を優しく撫でられた。女王陛下に遭遇したことを除き、その頃のことは、あまり記憶にない。〔スコットランドの〕ジェイムズ〔・スチュアート〕が王位につ即くまで、想い出せることといえば、ただ息子を授かったが直後に亡くしたこと、一心不乱に学問に打ち込んだことだけである。書物を読めば読むほど、ますます知識欲が高まった。

[一六〇三年] ジェイムズが英国王と認められ、ロンドンに向けて出立されたので、スタンフォード近郊のバーリー〔・ハウス〕で陛下に拝謁するのがよいと思った。直後、バースの騎士に叙勲された。古式に則り儀式が執り行なわれた。ご臨席を賜った貴顕紳士・淑女の間で、男前が評判となった。その誉め詞を信じるとすれば、自惚れが強いと思われるだろう⁽²⁹⁾。

古風な習わしをいまだに忘れられない。その風習によると、国王陛下よりナイト叙勲の勅命を賜ると、新たにバース騎士団に加わる者は、その右足にある貴顕紳士より拍車を取り付けてもらうことになっている。シュローズベリー伯爵は、私の従者が拍車を手にしているのをご覧になり、伯爵自ら私に近づいて来られた。貴君はきっと立派な騎士になるであろう、よって私が君に拍車を付けてあげる、と仰せになった。伯のご高配に慎んで感謝の意を表してから、足を壁に立てかけると、伯は拍車を付けられた。

もうひとつ同様な仕来りがある。新騎士団員は初日、ある修道会のガウンを身に纏い、当夜沐浴を済ませたあと、次の誓約をすることになっている。不正が行なわれる処に同座せず、全身全霊をかけて正すと。特に、上流階級のご婦人が万一、名誉に係わることで非道な扱いを受け、しかも助けを求めているとしたら、あるいは他の多くの事柄においても、中世のロマンスに登場する遍歴の騎士と同じ務めを果たすと。

二日目には、タフタ織りの緋色のローブを身に纏い（その肖像画は書齋に掲げてある〔現在は、ポウイス城に〕）、セント・ジェイムズ宮からホワイトホール宮まで、従者を露払いに鞍上で駒を進める。三日目には、深紅色のガウンを身に纏う。左の袖に、白い絹糸と金糸で拵った組み紐の飾り結びと房飾りを縫い付ける。それらの飾りは、人々に認められる武勲をたてるか、あるいはある貴婦人がその飾りを取り去り、彼女の袖に付け、立派な騎士だとのお墨付きを賜るまで取り外せない。私はこの組み紐飾りを長きにわたり身に着けずに済んだ。とある貴顕淑女、その御方は宮廷一の美貌と世の聞こえも高いが、私から飾りを取り、私のため名誉にかけて誓ってくれた。御方の名は伏せておこう。後にある事件が起こり、今は口を噤まざるを得ない。とはいっても、何を言ったところで、夫人の顔に泥を塗り、夫人に危害が及ぶことはないが。

この直後に、海軍大臣ノッティンガム伯チャールズ〔・ハワード〕とスペインに行くつもりであった。伯爵は両国間で和平協定を結ぶ任務を帯びていた。だが、近親者から執拗に泣きつかれ阻止される形となった、つまり自国に止どまって欲しいとの懇願を聞き入れた。〔一六〇五年〕その派遣団を諦める代わりに、モントゴメリー州の長官となった。この要職についてはあまり語る気はないが、私の裁量で任命できる長官代理や他の官職を、賄賂や贈答の品に目が眩み与えたことは一切ない。生涯にわたりこの旧来の陋習を、全国津々浦々この目で見てきた。フランス大使であった時も、

前任者が法的な優遇措置をした見返りに、商人などから賄賂をたくさん掴まされており、その例に倣うこともできたが、どんな条件であれ如何なる袖の下をも断固として受け取らなかった。

公務を理由に、里暮らしで好きな学問研究を止めることは、ほほなかった。時に宮廷に参内する機会があったが、宮仕えする野心があった訳でもなく、ましてや当代に蔓延する酒池肉林に憧れた訳でもない。結婚して約十年、妻と暮らし夫婦の契りを違えず、あらゆる誘惑を絶った。そのせいで不義の妄想に取り憑かれたのも事実だ。

{ジェイムズ王の治世三年目 [一六〇五年]、火薬陰謀事件が起きた。私自身はと言えば、サー・ウィリアム・ハーバート [ポウイス卿] に請われて、モントゴメリー城の所有権を譲渡したのと引き替えに州選出の代議士となり、チェアリング・クロス近くの母の家に暮らしていた⁽³⁰⁾。恐るべき陰謀の前夜、翌日に議事堂に行かぬようにと、夢の中で二度忠告を受けた。単なる夢だと思っていたが、はからずも予知夢であることが判った。というのも、サー・ウォルター・コウプが十一月五日六時頃やって来て、如何にして計画が露見したのかその経緯と、そして事件が落ち着くまで外出せぬようにと伝えた。数日後、枢密院から伝令が来た。陰謀を企てた一味が現在シュロップシアからさほど遠くないスタッフォードシアに潜伏しており、陛下に反逆する輩を鎮圧する部隊を召集せよとの命令書が発出された。出立準備が整ったとき、サー・トマス・ダットン [デットン] より同行の申し出があり、快諾した。早馬を乗り継ぎ潜伏場所からさほど遠くないスタッフォードシアはダッドリーへ急いだ。ところがその前夜、陰謀者たちが逃亡前に火薬に火種を点けるとき顔を焦がしたため、あらぬ誤解からとんだ椿事が生じ、それが未だに忘れられない。というのは、ダットンが道中落馬し顔に泥が付き、仕方なく宿屋で休息を取り、服の汚れを落とし顔を洗ってから投宿先のプレストウッドに行こうと考えたからだ。このような次第で、宿で馬から降りると、そこに市長が突如として二、三十人の武装した住民を引き連れ姿を現した。ダットンの顔半分が黒くなっているのを見て、火薬で顔が黒こげになった陰謀者の一味だと即座に決めつけたのだ。すると、問答無用でダットンを突きとばし、危うく火炙りにされるどころだった。無礼な態度に私は剣を抜いた。ダットンはその挙動を見て私に近づき耳打ちした。相手を十二人は殺せるだろうが、こちらも殺られるのは必定、こいつは俺に任せろと。それで、ダットンはなぜ突きとばしたのか訊いた。答えて言うには、顔が黒く謀叛者だと思ったと。ダットンの弁明、顔の黒あざは直ぐに洗い流せる。水を所望して、顔の汚れを落とす。市長はそれでも合点がいかず、ダットンを尋問する傍ら、私をも調べさせた。ダットンに為された問いは、どこから来たであった。ロンドンから、と返事したという。私に為された問いは、どこへ行くであった。シュロップシアかスタッフォードシアか、あるいは陰謀者がいる所ならどこへ

でも、と答えた。第三者がこれを聞き、別々に尋問して得心がいったらしい。大笑いして一件落着。市長は仲間を引き連れ撤退。我々は先を急いだ。}

一六〇八年頃のこと、ふたりの娘ベアトリスとフローレンス（こちらは長生きはしなかった）と息子のリチャードがすでに生まれており、三人ともある程度の年齢に達していた。年端もいかぬ子供だったものの、長寿を全うできる見込みが高く、三姉妹弟を前にして妻を呼び寄せ尋ねた、子供は好きかと。ええ、と答えたので、俺と同じことを子供たちにしてあげられるかと訊いた。それはどういう意味ですかと聞き直したので、己の考えでは、俺は男としてまだ若く、お前も女として捨てたものではない。我らの寿命は神の御手に委ねられており、どちらか一方が先立つと、遺された者が再婚して子を儲け、その子に財産を割くことがあるかも知れない。その予防策として、俺もそうするつもりだが、証書を作成して、不動産の揚がりのうち年三百ポンドから千ポンドを息子に譲る気はないか、と持ちかけた。しかし、妻はそれに同意せず、自分から横車を押したくありません、ときっぱり答えた⁽³¹⁾。直後、その件で良い条件を出し、数日の猶予をもらおうと思ったが、妻は気分を害した様子でその場を立ち去った。一週間か十日後、俺の発案をどう思うかと、再び尋ねた。妻が一言も答えなかったことからすると、その点に関してすでに十分答えたつもりでいたらしい。それで、もうひとつ要望を出した。結婚する前には海外に出かける年齢に達していなかったから、しばらく海外視察に出る許可をもらえないかと。けれど、妻は前述の如く資産を子供に譲るのであれば、それと引き替えに私を手許から離さないつもりだった。答えて言うには、資産譲渡については前々から妻である妾^{わらわ}の考えをご存知のはず、しかも海外に出てもらいたくないのもご存知のはず。それでも敢えて行く必要があると仰せなら、止めはしませんと。この言葉のお蔭^{しがらみ}で、柵から解放され心置きなく海外出立の準備に取りかかれた。外国の見聞という長年にわたる願望を叶えられることになった。それでも、生木を裂く思いをさせて旅立つのも躊躇され、サン・ジュリアンはハーバートの家名を継ぐ者に父祖伝来の地所を伝えたいという岳父の遺志を重んじ、夫婦の間に子を儲けただけでなく、妻が嫁ぐ際に持参した土地収入をも残した。ただ、自身の財産は、兄弟の年金や姉妹の持参金の支弁と、海外での諸費用の支払のため留保した。この条件で、妻の許を去るのは気が引けたが、この間一度たりとも不貞を働いたこともなく、外国の知識を得ても不当な野望ではないと思った。特に、言葉の習得は大半を済ませており、自国を離れ長期間逗留するつもりはなかったから。

旅立つ前に息子をもうひとり妻に授けた。後に洗礼を施しエドワードと命名された。宮廷に赴き出国の許可を得た。道連れは、フランス語とイタリア語そしてスペイン語を自由に操れるオーレリアン・タウンゼンド氏、フランス語を話す侍従、馬丁ふ

たりそれに馬三頭。ドーヴァーから海を渡りカレーに到着。それからフォブール・サン＝ジェルマンに至るまで、何ら括目に値する冒険はなかった。フォブール・サン＝ジェルマンでは、当時の駐仏大使サー・ジョージ・カルーから歓迎を受け、食卓にも招かれた。隣家には、ヴァンタドゥール公爵〔アンヌ・ド・レヴィ〕が暮らしていた。公爵夫人はフランスの大元帥モンモランシー閣下〔初代アンリ〕の御息女〔二女マルグリット〕であった。公爵夫人と大使夫人とは頻繁に往き来があり、公爵夫人は親切にも、私をご実家のメルルー〔メロ〕城（パリから約二十四〔三十〕マイル）に招待して下さった。そこで偉大な老元帥より大歓迎された。私の名前が告げられると、名門の出であることは十分に承知しておる、と閣下は仰せられた。続けて、ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートの指揮のもと、祖父〔エドワード・ハーバート〕が歩兵を統轄したあのサン・クエンティン包囲の際、ハーバート一族は敵ながらあっぱれ、とはじめて認めたという。メルルーに二、三日逗留したあとの、とある夕暮れのこと。公爵夫人のご令嬢、つまり元帥閣下の孫娘、歳の頃合いは十か十一、黄昏時に城から牧場に散策に出られた。連れは、姫様に仕えるフランスの騎士と私、それに侍女たち。その孫娘は頭にリボン結びを付けており、それをフランスの騎士がすばやく奪い取り、帽子の鉢巻き代わりにした。孫娘は盗まれたことに腹を立て返却を求めたが、詮無しであった。あなた、取り返して頂けません、と頼まれた。それで奴のところに行き、礼儀正しく帽子を手に持ち、リボンを持ち主に返す榮譽を担わせてほしいと下手に出た。だが奴は無礼千万、お姫様に拒んだものを貴殿に渡すと思うか、と悪態をついた。それでは腕づくで頂きましょう。すぐさま帽子を被り奴の帽子に手を伸べると、奴も取られまいと走って逃げた。牧場をさんざん走り回ったあと、ようやく追いつたかと思ったのも束の間、奴が急旋回して捕らえそこなった。すると奴は孫娘に走り寄り、あのリボンをまさに手渡そうとするところであった。その瞬間、奴の腕を掴まえ、孫娘に言った、私の手柄ですと。いいえ、あの方ですわと宣ったので、お言葉ですが、小生がそう仕向けたのであって、それを奴が認めないのであれば決闘を申し込みます、と啖呵を切った。フランス人の奴はしばし無言であった。それで姫様を城まで送り届けた。翌日、タウンゼンド氏に頼み、あのフランス人に、小生が無理強いをしたからこそリボンを返したと非を認めるか、そうでなければ決闘をしろと伝えてもらった。しかし奴は果し状を受け取る気がなく、尻尾を巻いて逃げた。すぐさま追いかけたが、そのいざこざが元帥閣下に仕える者たちの目に止まり、閣下に報告した。閣下は件の騎士^{くだん}を呼び寄せ、孫娘からリボンを奪うとは何事かと一喝、奴の狼藉を叱責した。そのあと奴に城から退去するように命じた。これがあのフランス人について聞いた顛末である。私があのような行動に出たのは、バースの騎士^{ナイト}に叙勲された時に立てた、あの誓願を忠実に果たそうと思ってのことだ。その件は、すでに折に触れて述べた。

決闘に付随して思い出すことは、他に三度、上流階級のご婦人方の名誉を傷つけた輩に決闘状を送り付けたことである。そのひとつは、ハモンのジョン・バーカーに嫁いだ、伯父サー・フランシス・ニューポートの娘、すなわち従姉の名誉を護るためであった。ジョン・バーカーの弟で世嗣のウォルターが従姉を陥れた。従姉が館で他のだれより好意を寄せる召使いと、主従の関係を越えた懇ろな間柄であると思っただけでいい。ウォルター・バーカーは、人伝てに聞くところによると、ふたりの怪しげな関係に水を差すどころか油を注ぎ、やがて兄ジョンに告げ口をしたという。思うに、原因の一端は弟ウォルターの背任行為であり、決闘状を送るべき案件であった。だが、今日に至るまで応答もなく、いずれは打ちのめしてやったであろうが、伯父サー・フランシスに阻まれた。

ふたつ目は、アベルマルレスのジョーンズ夫人となった妹〔長女エリザベス〕の名誉が汚されたので、キャプテン・ヴォーンと決闘する破目になった。決闘状を叩きつけると、受けたので互いに介添人を付け、場所を両者の中間地点でグリニッジの彼方と定めた。そこで、翌朝決闘の舞台に遅れないようにグリニッジのキングズ・ヘッドに行くと、その居酒屋はすでに少なくとも百人の者たちに取り囲まれており、その一部は枢密院より派遣された者だった。私を捕らえる令状が出ていた。この噂を聞きつけ、召使いに頼んだ。旅籠から馬を曳いてくるように、それも私の視野に入らないうちに、しかもできるだけ遠くに待機させるようにと。逃げる準備が整ったところに、取り巻く一同の者が私を捕縛しに来た。介添人で親戚のハナクリのジェイムズ・プライスと私は剣を抜き戸口から打って出た。多勢に無勢だったが、馬まで辿り着けた。召使いが私を捕らえようとする一同の者と激しく揉み合っている隙に、鞍に跨った。逆に召使いは捕縛され、酷い仕打ちを受けた。彼を見捨てるはずもなく、現場に戻り剣で縄目を解いてやった。召使いが馬に乗るのを見届け、一同の者を前にして、我らの後を追わずに何処かへ行けと厳しく言いつけた。そのあと、プライスを連れて約束の場所に行ったが、誰もいなかった。後で聞いた話では、枢密院が事の異変に気が付き、相手を逮捕した上で、陛下の名にかけて決闘するなと命じたという。そうでなければ、今ごろヴォーンは、首と胴が泣き別れになっているであろうに。

この種のことで取り上げる三つ目は、あるスコットランド人である。先述したフランスでの出来事と同様、高貴なミドルモア夫人からリボンを奪い去った。場所はアン王妃がグリニッジ宮で寝泊まりする寓居の奥の間であった。前回と同様、夫人から、リボンを取り返してもらえませんかと頼まれた。以前と同じように、その野郎のところへ赴き、礼儀正しく返すように申し出た。だが野郎は、知れたこと、とフランスの奴と同じく拒んだ。それで野郎の首根っこを押さえつけ、今まさに投げ飛ばす寸前のところだった。するとそこに、仲間が割って入り、ふたりを分けた。その野郎に決闘を申し込み、ハイド・パークのそばで決闘の舞台となる処に行ってみると、枢密院の

命により阻止された。そのスコットランド人のことは、それ以来、風の便りもない。

これらのエピソードを、同じ時系列ではないにしても、ここで語る訳は、同種の話
を羅列するだけで論証となり、騎士の誓願を墨守しているのが解って頂けるからである。残りの決闘も実話を語るができる。キリスト教国の偉大な君主の宮廷や軍隊
で生涯を過ごしてきたが、それでも自分のためだけに喧嘩をしたことは一度もない。
私自身としては、血の気が多くすぐにカッとなる質だが、それでいて凶状持ちという
こともなく、誰かに仕掛けられて怒髪天を衝く態に陥ったこともない。しかも、同じ
時代の人と較べても、武勇に関する名声は一点の曇りもない。身内のためには命を賭
して闘ったことしばしばであるが、己のために拔身の剣を振りかざしたことはない。
ただ常に恥辱を憎み、侮辱的な行為に憤慨することはあっても、人を憎んだことはな
い。話が逸れたので、もとに戻そう。

武勇の誉れ高いフランスの元帥閣下から、以前にもまして寵愛を受けた。メルルー
から五、六マイル離れたシャンティイの美しき城に向けて出立される際、ここメルルー
の居城と猟場の森とを自由に使ってよいと仰せになられたほどだ。猟場には野猪や
鹿が溢れ、好きな時に狩りが楽しめる。続けて、軍馬に乗る訓練をしたいのなら、フ
ランスでも選りすぐりの軍馬五十頭余りを擁する厩舎があり、師範プリュヴィネルや
ラブルーに優るとも劣らない閣下お抱えの調馬師ディザンクール殿に馬術の心得を習
うとよい、と仰せになった。かねてより軍馬に乗る訓練を受けたかったので、心の底
より感謝し閣下の申し出を受けた。森での狩については、獲物の数を減さないよう、
控えめにする所存と伝えた。閣下はさらに、調馬師に食卓の手配を、小姓らに身の世
話を言いつけた。小姓らを統轄する頭はメノン [ムヌー] 殿といい、フランスで最高
の馬術家である。メノン殿は現在パリで馬術学校を経営している。当時のフランスの
風潮が明らかになると思われるので、師弟の間で交わされたやり取りを披露しよう。
決闘で人の命を奪ったことがない人々の中で、注目に値する人物はそう滅多にいない
から。

メノン殿が師ディザンクール殿に、姪御様を妻として迎えたいと申し出でると、師
は自分の跡取りになるかも知れぬと考え、弟子にこう答えた。時期尚早だ。祝言を挙
げるまえに為すべきことを教えて進ぜよう。強者になりたくば、まず一対一の決闘で
二、三人殺め、次ぎに嫁を娶り二、三人子を儲けるがよい。そうすれば、世の人口は帳
尻が合うというもの。ディザンクール殿がこの人生の指針を創案したとは妙である。
生涯で三、四度勇敢にも決闘する機会に恵まれ、少なくとも前半部分の範例となりえ
たのは事実だが。

ここメルルーに滞在するようになってから、午前中は軍馬に跨り、昼からは何度も
狩りに出た。狩猟の仕方はこうだ。モンモランシー公爵がメルルーの町と隣接する村
の借地人らに、私が狩りに出るとき勢子を務めよと命じてあった。私の呼びかけに応

じて、獲物を見つけないと思う森に太鼓と小銃を携え、数にして通常は六十から八十、時に百人以上参集してくる。供の者たちは森のあちら側から、鉄砲を撃ち太鼓を鳴らすなど音を立てながら森に入る。我らは森のこちら側から、マスティフ犬とグレーハウンド犬（モンモランシー閣下が城の近くで飼っている）を数にして二、三十匹を放ち、猟犬が獲物を駆り出すのを待つ。赤鹿の雄や野猪が出てきても普段は見逃し、半狼犬だけを追う。半狼犬は森にとてもたくさんいて、二種類に分類できる。マスティフとの交雑狼犬は肢が太くて短い、実際には足が速く、猟犬と格闘することがある。グレーハウンドとの交雑狼犬は肢が長く敏捷で、最速の猟犬でさえ追いつけず追跡を免れるものも多いが、追いつかれるとあまり抵抗せずとも簡単に仕留められる。ここに滞在中、剣でこの二種類の半狼犬を何度も討ち取った。

ある時、幸運にも、こんな風に野猪を仕留めた。野猪がねぐらから駆り立てられ、我らの前に姿を現した。しばらく猟犬が吠えるにまかせていたが、激しく責め立てられると犬の方を向き、二、三匹をひどく傷つけた。鞍上で駆け寄り、剣で二、三度突いたが獣皮を貫通しなかった。剣先がそれほど堅固でなかったらしい。攻撃を受けた野猪は私に牙を剥き、馬を危険な目に遭わせそうな勢いだったので、少し先で馬を降り馬丁に預けた。再び剣を持って野猪に襲いかかった。野猪はこの時までさらに多くの猟犬を駄目にしていた。かなり激しく格闘をした。その時、何度か剣で突きを喰らわせたが、ある箇所は獣皮を突き抜けた。野猪は私めがけて突進して来そうになり、脇に少しよけて猪牙を躲したが、また歯向かってきた。すると猟犬が間に入り奴を引き離すと、今度は猟犬を襲った。何度か私と犬とで交互に攻撃を繰り返す、ようやく野猪を仕留めた。この現場に、ディザンクール殿やメノン殿それにタウンゼンド氏も居合わせた。窮地に際して援護してくれるどころか、退却するのに一生懸命であった。ももんじに塩と胡椒をまぶし、さらにラード油で風味を添え、シュロップシアの伯父ニューポートに贈った。美味この上ない代物だったという。

このようにひと夏の間ずっと、ある時は馬術の稽古や狩猟に明け暮れ、またある時はモンモランシー公爵のご機嫌を伺いにシャンティイの城館に参上した。

シャンティイが風光明媚な領地となった立地条件を祖述し、その絶景を描いておく。ある小高い丘から小さな川が、ほとんどすべてが閣下の所領である地域を流れている。川の流れるは溪谷の真ん中にある岩石に阻まれ、右あるいは左に下る。モンモランシー家の父祖が川の流れるをよくするため、岩場に何本も水路を設けた。このようにして岩場を割って小さな嶋ができ、それぞれの嶋に橋が渡され、その上に堅牢な城が建てられた。城内には、絹糸や金糸の綴れ織りと希有な絵画および彫像で豪華に飾られている。すべての建物は水で取り囲まれているが、先述の如く連結していて、しかも岩場から切り出した石で敷き詰められている。大きな鯉や鮒や鱒が生け簀に飼われており、自由に泳ぎ回る姿が見られる。だが私見では、建物と同じ高さまで生長し

た隣接する森林ほど、この城に榮譽を与えるものは他にない。森全体は広大な面積で、そびえ立つ樹木と茂りに繁った下生え、野猪や赤鹿や小鹿^{ノロジカ}などが多く棲息し、あらゆる方角に林道が走っている。そのお蔭で、獵犬が藪に入り獲物を追いかけても、狩人はその道を騎で進み、いずれかの道で獲物に遭遇するか、あるいは追いつく仕組みとなっている。森は工夫を凝らし切り拓かれており、林道は隈無く繋がっている。ここでもまた、その時とそれから後も、閣下の御子息で比類なき城館を継承したモンモランシー公爵〔二代目アンリ〕と一緒に、何度か野猪を仕留めた。

そして老元帥閣下より、この見事な迷宮から城に戻る方策を授かったが、そのことが今でも忘れられない。まず、人の手が加わっていない鬱蒼とした森林はどちらの側にあるかを見る。その方角が北である。次に、その木立に向かって右手が東の方角である。すると、城へ戻る道が判ると。

森を背景に持つこの名城が如何ほどに価値があったかは、ここに差し挟むふたつの挿話で知れるであろう。フランソワ一世の御代、神聖ローマ皇帝カール五世〔スペインのカルロス一世〕がスペインからフランスを経由して低地帯に赴く際、同様に元帥であったモンモランシー公爵〔先代のアンヌ・ド・モンモランシー〕より、この城でしばし歓待を受けた。皇帝は城が森に隣接していることなどを考慮され、次のように仰せられたという。このような景勝地は、他にないと思う。この城を献上してくれるのであれば、低地帯の属州をひとつ進ぜ^{やぶさ}るに吝かではないと。

アンリ四世もまた、この名城を所望された。仏王の数ある城館のひとつに、さらに価値ある地所を加えて交換するのはどうかと。その要請に対して、モンモランシー公爵が答えて曰く。英語に訳すと、陛下、この城は王家の持ち物でございます。陛下のためにこの城を管理する許可を賜らんと。〔モンモランシー家の三女シャルロット＝マルグリット（コンデ公爵夫人）は、アンリ四世の愛妾のひとり〕

ハカ月あまりメルルーで過ごし、馬術では免許皆伝の腕前となり、シャンティイにモンモランシー公爵を訪ねた。ご高配に見合った感謝を捧げ、パリに行くため暇乞いをした。するとすぐ、老公爵は私を抱擁し息子よと呼びかけ、ご機嫌ようと言われた。別れの挨拶を済ませたばかりなのに、これから先も好意と敬意を表せる機会があればうれしく思うと念を押された上で、すぐにパリに戻るの、また会おうとも告げられた。シャンティイからメルルーに戻り、ディザンクール殿に食事の世話と馬術の稽古のお礼として、贈り物をした。出発準備が整ったとき、モンモランシー公爵から遣いが来て、愛情の手付けとなる贈り物を受け取るまで出立なされぬように、と引き留められた。小馬を一頭贈られた。使者の話によれば、公爵閣下がスペインより急いで取り寄せた小馬で、クラウン金貨〔エキュ〕五百枚の値がつくという。受け取った贈り物の価値と親切なお言葉のため、それに見合う返礼の仕方も解らず、とても困惑した。フランスに連れて来た馬たち（公爵にとっても高価な代物）を献上しようと思

ったが、それでは足りぬと身に染みて感じた。そのような私の気持ちを察せられ機先を制するが如く、公爵から伝言を賜った。翁を大切に思うなら、フランス滞在中返礼は無用である。ただ、イギリスに戻られたなら、自然な足並みで側対歩ができる牝馬ひんばを一頭頂ければ幸いであると。あらゆる手を尽くし、その様に致す所存であると使者に伝えるとともに、鄭重に謝意を表し、心付けを十分に持たせて帰した。

パリに戻ってきた。駐仏イギリス大使の仲立ちで、比類なき学者イザク・カゾボン〔ジュネーヴ生まれのフランスの古典学者、一六一〇年にイギリスに招聘される〕の邸宅に招かれた。お話を伺い、得るもの大であった。さらに、フランスの師範の例に倣い、刀剣の使い方、軍馬の乗り方、リュートの弾き方、発声術に専心した⁽³²⁾。

時に、フランス国王アンリ四世の宮中に参内した。チュイルリーの庭園で私のことを聞いて、陛下は優しいお言葉を掛けてくださり、しばし抱擁された。時に、〔前〕王妃マルグリットに拝謁するため、その名を冠する市内の屋敷を訪ねた⁽³³⁾。そこでは舞踏会や仮面舞踏会が盛んに催された。私は王妃の命で、常に妃殿下の隣の席に公然と坐らされた。常々その座を占める榮譽に浴していた者から、ある時は怪しまれ、ある時は嫉妬されない訳でもなかった。その屋敷にいたとき、ある出来事が起こった。

舞踏会の準備がすべて整い各人がそれぞれの席に着き、私も妃殿下の隣に陣取り舞踏が始まるのを心待ちにしていたとき、礼儀作法に悖るほど、激しく門を敲く音がした。入場すると、突然ご婦人方が色めき立ち、バラニーバラニーの若様だわ、と囁く声があったのを憶えている⁽³⁴⁾。すると間もなく、女性たちが次々とその人物を自分の傍らに坐らせようと、争奪戦が始まった。ある貴夫人が彼としばらく同伴した後、別の夫人が、長時間独占なさったのですから、是非ともこの方を拝借致しますわ、とぬけぬけと言った。厚顔無恥な態度に仰天したが、当の人物がせいぜい並みの男前に過ぎず、不思議でたまらなかった。髪は短く刈り込んだ胡麻塩、胴衣はシャツ用に裁断した麻布製、半ズボン半ズボンは質素な灰色の生地で作られていた。そばにいた人に、人物評を聞いた。一対一の決闘で八、九人を殺め、巷で評判の豪勇の士だという。それで女性たちは若様をちやほやしているらしい。というのも、英雄を崇めるのがフランス人女性の流儀であり、女人の通説では、面子を保つしか能のない男は重んじる価値がない、という。この騎士は、胡麻塩頭だが、三十歳に満たなかった。後にジュリヤーズ包囲の際、彼との間でちょっとした小競り合いが起こる。ここでしっかりと記憶に留めておこう。その因縁話は、いずれ然るべきところである。

《注》

- (21) ジョン・ロックも、子供の訓育に必要な運動として、剣術と馬術とを挙げる。やはり、馬術といっても軍馬 (great horse, i.e. steed) に乗ることであり、乗馬や競馬ではない。但し、

ロックは馬術について、娯楽以上に没頭すべき鍛錬であるか疑問を呈している。ダンスについては、子供たちに相応しい自信と振る舞いを与えるだけではなく、男らしい考え方や態度とを与えるという。『教育に関する考察』前掲、八四頁、三一〇頁、三一二―一三頁。

- (22) サロモン・ド・ラブルー (Salomon de la Broue [Labroue], 1552 or 1530-c.1610) は、『フランス式馬術』(*Cavalerie francaise*) の著者。ヨーロッパにおける馬術ルネサンスは、十六世紀にローマとナポリで始まる。ナポリの貴族グリゾーネ (Federigo Grisone) が、古代ギリシアのクセノポンによる馬術書を基に、調教や馬術を教える学校を設立。その一番弟子が、ピニャテルリ (Giovanni Pignatelli)。ピニャテルリの運営する馬術学校に、フランスからラブルーが遊学する。グリゾーネの推奨する調教の仕方は、クセノポンの説く「鉛と鞭」の内、どちらかと言えば、力による馬の制圧である。Xenophon, VII, *Scripta Minora*, trans. E.C. Marchant (London: William Heinemann, 1968); 荒木雄豪編『クセノポンの馬術』田中秀央・吉田一次共訳 (恒星社厚生閣, 一九九五年); John Astley, *The Art of Riding* (1584; rpt. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1968); 木下順二『ぜんぶ馬の話』(文春文庫, 一九九一年); およびエティエンヌ・ソレル『乗馬の歴史 起源と馬術論の変遷』吉川昌造・鎌田博夫共訳 (恒星社厚生閣, 二〇〇五年) 参照。
- (23) アントワヌ・ド・プリュヴィネル (Antoine de Pluvinel, 1552 or 1555-1620) は、ラブルーと同様、ピニャテルリの学校に学ぶものの、彼の調教の特徴は、「鉛」に重点を置き、騎手の思いを如何に優しく馬に伝え従わせるかにあり、グリゾーネの系譜とは対照的。プリュヴィネルは、フランス国王ルイ十三世の家庭教師のひとりであったが、馬術書 (問答形式の指南書) を著す。『国王の馬術』(*The Maneige Royal*, trans. Hilda Nelson [1623; rpt. London: J A Allen, 1989]) 著名な版画家を父に持つ同名のクリスパン・ド・パ (Crispan de Pas) による挿絵が、調教の様子を窺わせるとともにエアの理解に役立つ。また、『国王の馬術』(現代英訳) に付された訳者ヒルダ・ネルソンによるエアの注解も、諸跳躍の実相を知る上で有益である。ハーバート卿の自伝で後に登場するメノンことムヌー・ド・シャルニゼ (Menou de Charnizay) は、プリュヴィネルの友人で、『国王の馬術』の改訂新版『帝王学』(*L'Instruction du Roy*, 1625) の編者である。
- (24) 紀元前五五年にユリウス・カエサル率いるローマ軍がブリテン島に侵攻して以来、水練は軍役に役立つ技法、例えば、武器や兵器を携えて川を渡る、あるいは難破したとき岸までたどり着く実務的な技法として、重用されてきた。近代初期になると、自他ともに救命に役立つとともに、健康増進とリクリエーションの効用がとり沙汰されるようになる。Nicholas Orme, *Early British Swimming 55 BC-AD 1719: With the First Swimming Treatise in English, 1595* (Exeter: U of Exeter P, 2003). ジョン・ロックも、男の子に水泳を勧めるが、その目的は、人命救助と健康増進である。『教育に関する考察』前掲、二二頁。
- (25) Stefano Guazzo, *The Civile Conversation*, English Translation (1581 and 1586); Giovanni Della Casa, *Galateo* (1558). 池田廉訳『ガラテオ』池上俊一監修『原典 イタリア・ルネサンス 人文主義』(名古屋大学出版会, 二〇一〇年) 所収、八五五―九二一頁。自伝のこの箇所は、ハーバート卿の弟で詩人兼牧師ジョージ・ハーバートの『田舎牧師』とイタリアの上記礼儀作法書との関連を解明する上で、手掛かりのひとつである。Kristine A. Wolberg,

“All Possible Art”: George Herbert’s *The Country Parson* (Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2008), p. 90; 曾村充利「聖なる実用書 ジョージ・ハーバートの『田舎牧師』: 教区牧師マニュアルに見られる *via media*」*The Hosei Journal of Global and Interdisciplinary Studies*, 4 (2020): 62-63.

- (26) 前出『チューターとその教え子との会話』のことであろう。Cf. Margaret Bottrall, *Every Man a Phoenix: Studies in Seventeenth-Century Autobiography* (London: John Murray, 1958), p. 63.
- (27) 当時のものではないが、二十世紀イギリスの伝記作家リットン・ストレイチーによる『エリザベスとエセックス: 王冠と恋』福田逸訳(中公文庫, 一九九九年)参照。なお、第二代エセックス伯は、一六〇一年二月二五日、ロンドン塔で斬首された。
- (28) 件の口癖と訳した原語は, usual oath で, 神名濫用を指す。編者シドニー・リーは, God’s death: タマゲタではないかと推測する。Lee, *op. cit.*, p. 44n. あるいは, God’s wounds: アラマアかも知れぬ。ハーバート卿より二十歳ほど年上の廷臣ロバート・ケアリー(初代モンマス伯)は, エリザベス女王崩御に立ち会った際, 女王の口癖(アラマア)を耳にしたという。Donald A. Stauffer, *English Biography before 1700* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1930), p. 181.
- (29) 自伝における自惚れ vanity の賛美。「人生の他の様々な楽しみのひとつとして, 自惚れを与えてくださった神に感謝しても, 道理に合わぬ訳ではあるまい」『フランクリン自伝』松本楨一・西川正身共訳(岩波文庫, 一九九〇年), 九頁参照。
- (30) モントゴメリー城は, ハーバート卿の祖父の時代から居城であったが, 一六〇七年に国王ジェイムズの命で, 初代モントゴメリー伯フィリップ・ハーバート(第三代ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートの弟で後の第四代ペンブルック伯爵)に, その所有権が移る。一六一三年にハーバート卿は, 五百ポンドで買い戻したが, 一六一六年に本文に記されている経緯で, サー・ウィリアム・ハーバート(ポウイス卿)に譲った。しかし, またすぐに取り戻した。なお, ジョン・ダンは, 一六一三年の春, 桜草が咲くころ, この城を訪れた。詩集『唄とソネット』所収「桜草」(“The Primrose”)は, その訪問を記念する作と考えられている。John Donne, *The Complete English Poems*, ed. A.J. Smith (London: Penguin, 1980), p. 74 / 『ジョン・ダン 全詩集』湯浅信之訳(名古屋大学出版会, 一九九七年), 一〇一―一〇二頁。当時の伝記作家ジョン・オーブリーは, 「エドワード・ハーバート小伝」で, モントゴメリー城の春の風物詩「桜草の丘」に言及している。Aubrey’s *Brief Lives*, ed. Oliver Lawson Dick (Jaffrey, New Hampshire: David R. Godine, 1999), pp. 134-35 / 『名士小伝』橋口稔・小池銈共訳(富山房, 一九七九年)二一七頁。この古城は, 内戦で数奇な運命を辿る。議会軍に接収されたあと, 裏切りに腹をたてた王党派が包囲する。城主エドワード亡きあとは, 王党派の跡取り(リチャード)の所有となるが, 議会軍の攻撃を受け破壊。城石は売られ散逸する。今は, 城址。
- (31) 妻メアリーの返答「自分から横車を押したくありません」は, 訳者の意識。原文では, she would not draw the cradle upon her head (自分の責任で揺り床を引きたくはない)。シャトルワースによると, 当時の俚諺的な表現をもじったものだという。Shuttleworth, *op. cit.*,

p. 141n. そのニュアンスは伝えがたく、和の慣用句に置き換えた。内容は、おそらく、夫と死別したあと若い燕を引き入れません、であろう。もし、そのような含意だとしたら、この嫁の言い草には、姑に対する当てこすりが読み取れる。夫の母マグダレン・ハーバートは二十歳も年下の若者と再婚。再婚相手のサー・ジョン・ダンヴァーズは長子エドワードより年下であった。奇想を弄するジョン・ダンでさえ、マグダレン・ハーバートとジョン・ダンヴァーズの年齢差の結婚を弁護するのが困難であったとみえて、四十歳と二十歳を足して二で割ったら三十歳となる、と奇妙な算術を披露している。The Sermons of John Donne, *op. cit.*, VIII, p. 88; 『英文学と結婚』前掲, 一三二-三三頁; Jeffrey Powers-Beck, *Writing the Flesh: The Herbert Family Dialogue* (Pittsburg: Duquesne UP, 1998), p. 34; Allan Pritchard, *English Biography in the Seventeenth Century: A Critical Survey* (Toronto: U. of Toronto P, 2005), p. 84. この当てこすりは、孟母マグダレンに対するエドワード自身の葛藤をも示している。亡き父の遺産がすべて長男である彼に譲渡されず、あからさまに反発できなかった恨みに起因するらしい。だとすると、妻のペルソナを借り慈母に対して長年の鬱憤を晴らしたのかも知れぬ。Bottrall, *op. cit.*, pp. 69-70.

- (32) ケンブリッジ大学のフィッツウィリアム美術館には、ハーバート卿が一六〇八年頃から英国とパリで集めたリュート音楽の手稿譜 (*The Lute Book of Lord Herbert of Cherbury*, MU. MS. 689) が所蔵されている。それは、十七世紀初頭のリュート音楽を知る上で貴重な資料となるアンソロジーで、イギリスのダウランドをはじめとして、フランスの作曲家ゴーチエやリュート奏者による二四二の譜面から成る。現代でもその一部が、リュート奏者ポール・オデットによって再現され、CDで聴ける。Paul O' Dette, *Lord Herbert of Cherbury's Lute Book* (Los Angeles: Harmonia Mundi USA, 1998). ハーバート卿の弟ジョージ・ハーバートもリュート演奏の名手だったという。Walton, *op. cit.*, p. 303.
- (33) マルグリット・ド・ヴァロア、またの名、王妃マルゴ。アンリ四世とは一五九九年に離婚。しかし、アンリ四世がマリー・ド・メディシスと再婚後も、依然として王妃の称号を用いる。マルグリットがパリ市内、セヌ川の左岸に暮らす屋敷は、*L'Hostel de la Reine Marguerite* と呼ばれた。シャンティイの小城館を手掛けたジャン・ビュランの設計でもある。なお、「市内の屋敷」と訳した原語は *hostel* で、*OED* では *town mansion* の語義が与えられており、ハーバート卿のこの箇所が用例として挙げられる。
- (34) バラニーの若様ことダミアン・ド・モンリュックは、ジョージ・チャップマンの悲劇『ビュッシー・ダンボア』で扱われる英雄ビュシー・ダンボワーズの甥。